

幼児期の自閉性障害児をもつ母親の不安要因の検討

——TEM 図を用いた質的研究——

岸 田 愛 未

〈問題と目的〉

自閉性障害児にとって幼児期は①学童期以降に診断される一部の高機能を除けば、自閉性障害の多くは診断を受ける時期、②診断された自閉性障害児が特性に合わせた発達支援を受け始める時期、③同時に保護者にとっても障害を理解し、自閉性障害としての子育てを開始する時期、と重要な時期である。更に、早期発見・早期療育に繋げるためには母親の障害受容が大きな鍵となる。しかし、実際には障害告知の際、多くの母親は告知をした専門家の態度や説明に否定的な印象を抱いているという状況である。したがって、障害を熟知した、適切で具体的な助言を行える専門家を養成していくことが必要となる。

本研究では、障害告知を巡る母親の不安要因を検討することを目的とする。そして、不安要因を知ることで、不安を軽減できるような支援を模索することとする。

〈方法〉

幼児期の自閉性障害児をもつ母親 4 名に半構造化面接を行った。面接内容は時系列に沿った質問項目を作成し、語られたエピソードを複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : TEM) を用いて分析した。

〈結果と考察〉

障害告知の現状について、母親だけに告知をされるケースが多いことや、十分なフォローアップや情報提供ができていないことから、障害告知における重要なポイントが研究されているにもかかわらず、実際はその通りに告知されるケースはまだまだ少ないことがわかる。また、4 名とも言葉の遅れについて語っており、3 名が反応の乏しさ、2 名が多動で落ち着きがないことについても語っていることから、障害特性による不安が強いことがわかる。更に、現在における不安よりも将来に対する不安が強く、これは子どもが将来どのように成長していくのか見通しが立たないことが要因であると考えられる。また、子どもが良い成長をすることで母親のストレスは軽減するという先行研究を示唆する結果となった。

〈今後の課題〉

結果を一般化するには協力者の数が不十分であったと考えている。更に、就学が近いかどうか、障害の程度、自閉性障害児の両親が揃っているかどうかという点で、より細かく協力者を統制する必要がある。